

平成11年3月7日(日)
越谷市文化連盟設立30周年記念

『こしがや文化芸術祭』

越谷市郷土研究会 展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ

- 一. 大聖寺(大相模不動尊)の板碑
加藤幸一
- 二. 安国寺の古文書
鈴木秀俊
- 三. 250年前の大相模不動尊全景図
高崎力
- 四. 越谷の養鶏と鶏魂碑
森屋英龍

願文・・・願いごとの文、つまり造立の趣旨を表した文である。

この図の場合は、「右志者 慈父幽儀成仏也 孝子敬白」と刻まれていて、子が父の追善供養のために造立したことがわかる。

紀年銘・・・刻まれた年月日をさす。板碑を造立し、供養した年月日を表す。この図の場合は、「正嘉元年丁巳十二月晦日」と刻まれている。

2. 板碑の本場、埼玉県

最古の板碑が、荒川流域近くの埼玉県江南村の大沼公園弁天島で発見されるなど、ごく初期の板碑が埼玉県大里郡、北埼玉郡、北足立郡の荒川に近い地域に分布していることから、板碑の発祥地は荒川中流域と考えられている。その板碑の石材として、荒川上流の秩父地方で採れる、板状にはがれやすい性質をもつ緑泥片岩が利用された。これらの板碑を武蔵型板碑といい、埼玉県内を流れていた当時の荒川流域を中心に、埼玉県の他に東京都全域、群馬・栃木・茨城の各県の南部、千葉県西部、神奈川県東部などに分布している。これらは全国でも最も形態が整っていて、数量も最も多くみられる。つまり、武蔵型板碑は質量とも全国一を誇っているのである。特に埼玉県は板碑の本場である。埼玉県教育委員会が昭和51年(1976)10月から昭和56年3月までの5カ年間の月日をかけての板石塔婆緊急調査によると、昭和55年9月30日現在で、20,201基を確認している。

3. 越谷市の板碑

板碑は川を利用して各地に運ばれたと考えられている。越谷市内を貫通している元荒川は当時の荒川主流であったため、市内各地に板碑が豊富にみられる。昭和44年発行の「越谷市金石資料集」によると、96基及び破片40数個が確認されたという。その後もかなり発見されていよう。再調査が必要である。

4. 大聖寺保管の板碑

現在、大聖寺(大相模不動院)では、11基保管され、1基が所在不明である。11基のうち3基は越谷市の板碑調査後にわかったものである。

大聖寺保管の板碑紹介

加藤 幸一

1. 板碑とは

板石塔婆とか、青石塔婆とも言われる板碑は右図のような石でできた供養塔である。自分の死後の冥福を祈る逆修供養、あるいは死者の冥福を祈る追善供養のために建てたものである。板碑は中世に始まって中世に終わるといわれるように、鎌倉時代中頃から室町時代後半にかけて造立し、わずかであるが近世にはいつて安土桃山時代の慶長年間までみられる。江戸時代以降の造立は全くとだえてしまう。

板碑の特色は次の四つがあげられる。

- ①頂部は三角形(頂部山形)になっている。
- ②頂部の下に二本の切り込み線(二条線)がはいつている。
- ③一個の石材で作られている。県内では秩父で採れる緑泥片岩(秩父青石)を使用している。
- ④一面のみに刻まれている。裏には何も刻まれていない。

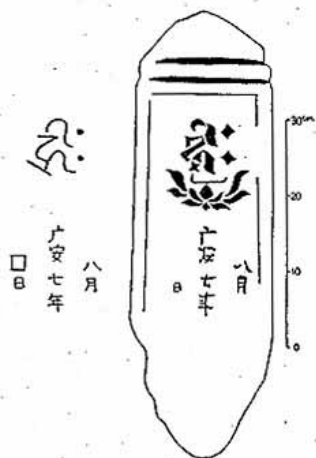
右上の図を説明すると次の通りである。

主尊・・・拝む対象としての仏様。上図では阿弥陀仏を表す梵字キリークである。わずかであるが梵字でなく画像で描かれている場合もある。
蓮華台・・・仏様を安置するための蓮の花でできた台。
偈文・・・経典からとった一節。仏を讃えたり、仏法の真髓を述べたりしている。この図の場合は観無量寿經という経典からとった四句からなる詩文である。偈文のことをただ単に「偈」とも言う。



No.3 応安七年(1374)弥陀一尊種子板碑

主尊・蓮華台ともV字形に深く彫る莖
 研彫で刻まれている。主尊キリーフは莖
 骸体で書かれている。莖骸体は比較的初
 期に多くみられる。蓮華台の上部には花
 心が描かれているのがわかる。蓮華台の
 下の「応安」は北朝の年号である。その
 向かって右側には「八月」が刻まれてい
 るが、左側は日にちが刻まれていたと思
 われる。塔身部には回りに郭線がみられ
 る。この板碑は西方番場の齊藤正雄氏の
 所有である。



No.4 康暦元年(1379)弥陀一尊種子板碑

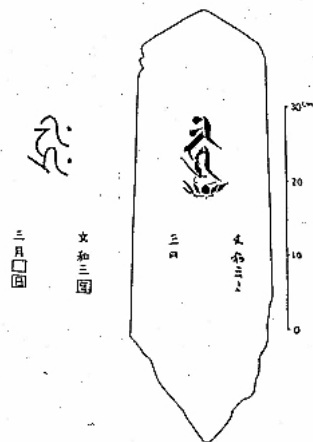
蓮華台に載った主尊のキリーフは莖骸体
 で刻まれている。蓮華台の上部には花心が
 描かれている。紀年銘の「康暦」は北朝の
 年号である。塔身部には回りに郭線がみら
 れる。

No.1, No.3, No.4 の三基の板碑は、西
 方の番場の齊藤材木店主齊藤正雄氏(相模
 町六丁目五六四の一)所有のもので、昭和
 六十二年二月頃に大塚寺に保管される。こ
 れら三基の板碑の発見のいきさつは、大塚
 寺所有だったものはえていた護摩本山と称
 する地(相模町六丁目四九四あたり。もと
 金剛寺の山林か?)を昭和三十五・六年頃
 に開墾した時に出土したものである。現在
 の護摩本山の地は宅地となっていてその名
 残りは全くない。



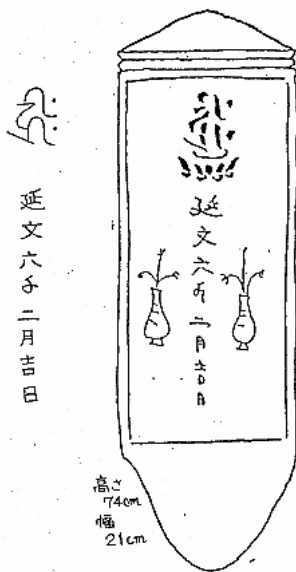
No.1 文和三年(1354)弥陀一尊種子板碑

蓮華台に載った主尊の種子キリーフは莖
 骸体で刻まれている。蓮華台の上部には花
 心を描いた跡が一部残っている。紀年銘の
 「文和」は関東に一般にみられる北朝の年
 号である。なお、南朝では正平九年にあた
 る。この板碑の表面はかよりすり減ってい
 て、銘文の判読が困難である。中央には文
 和三年三月に延修供養(生前に自分の死後
 の冥福を祈る)した人の法名(仏門に入っ
 た人や死者に授ける名前)が刻まれていた
 と思われる。この板碑は西方番場の齊藤正
 雄氏の所有である。



No.2 延文六年(1361)弥陀一尊種子板碑

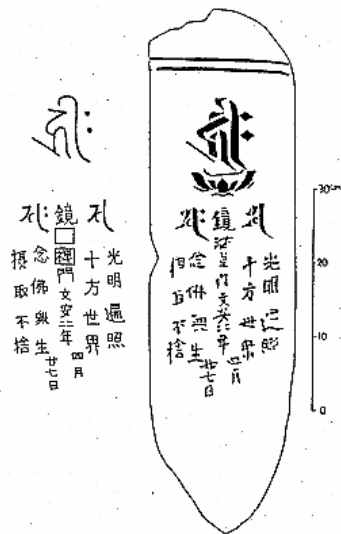
この板碑は現在所在不明である。「越谷
 市金石資料集」三十ページに記載されてい
 る図版によると、莖骸体で刻まれた主尊キ
 リーフと、それを載せた蓮華台が描かれて
 いる。蓮華台上部には花心がみられる。紀
 年銘の「延文」は北朝の年号である。紀年
 銘の両脇に一對の華瓶(仏前に花を供える
 時に使う入れ物。普通、金銅製の胴張りの
 壺で模様のないものが多い)がみられる。
 それぞれ三本の茎が描かれている。このよ
 うに双式の華瓶の場合は三茎が一般的であ
 る。また、華瓶がともに徳利形に描かれて
 いるが、これは初期のものによくみられる。
 なお、花も初期のものは、きちんと蓮の花
 を描くものがある。のち、花や華瓶がかな
 り簡略に描かれるようになる。塔身部には
 回りに郭線がみられる。



※この図版は越谷市金石資料集の10ページに載っているもの。

No.7 文安四年(1447)弥陀三尊種子板碑

花心も描かれている蓮華台の上に載る主尊ミツノ（キリーク・弥陀）の他、その左右下に脇侍ワキジ（主尊の左右に侍しているもの）であるサ（サ・観音）とス（サク・勢至）のあわせて三尊が刻まれている。銘文が書かれている中央には男性の法名とその下に年号・月日が、また左右には観無量寿經の偈文が刻まれている。この偈文についてはNo.6の解説文を参照のこと。法名の中の位号である「禪門」（男性）、「禪尼」（女性）は板碑によくみうけられる。鏡因禪門が文安四年四月二十七日に逆修供養したものであろう。



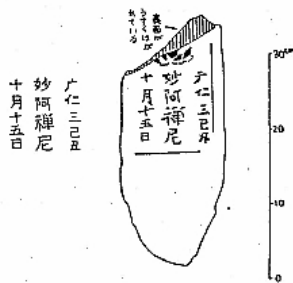
No.5 永徳二年(1382)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークや蓮華台は葉研彫で刻まれている。蓮華台の上部には花心も描かれている。紀年銘の「永徳」は北朝の年号である。永徳二年は南朝の年号では弘和二年にあたる。銘文の刻まれる中央には、永徳二年五月二日に逆修供養（生前に自分の死後の冥福を祈る）をした人の法名が縦に書かれていたと思われる。



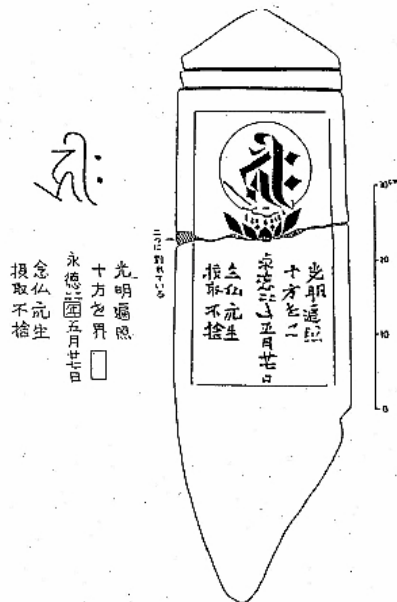
No.8 応仁三年(1469)一尊板碑

上部が欠落して主尊は不明。描かれている蓮華台の位置により、一尊板碑であることがわかる。また、郭線がみられる。中央に刻まれている法名は、位号が禪尼であるから女性である。位号をみなくても法名の中に「妙」の字があれば女性の法名であるとわかる。また、法名の中に阿号（南無阿弥陀仏の「阿」をさす）がみられるので時宗板碑の可能性が充分ある。すると、時宗を信仰する女性信者が応仁三年己丑歳の十月十五日に逆修供養したものであろう。



No.6 永徳四年(1384)弥陀一尊種子板碑

主尊と銘文との間で真二つに割れているのが残念である。主尊側をみると、花心も描かれている蓮華台の上に主尊キリークが刻まれ、しかも主尊の回りに肩鞆カタクと呼ばれる円がとりまいている。銘文側は、「永徳二年五月廿七日」と刻まれた紀年銘が中央にあり、その両脇には「光明遍照 十方世界 念仏興生 攝取不捨」という偈文（経典にある詩文で、仏を讃えたり、仏法の真髓を述べたりしたもの）が刻まれている。大意は「阿弥陀如来の光明は遍く十方世界を照らし、念仏を唱える人々を攝取して捨てたまわず」この偈は観無量寿經からとった経文で弥陀板碑にしかみられない。この板碑の塔身部には回りに郭線がみられる。



No.11 明応八年(1499)弥陀三尊種子板碑

主尊のキリークと脇侍のサ・サクの種子はそれぞれ月輪に囲まれ、蓮華台に載っている。三尊の上には天蓋(仏さまを覆う日傘のようなもの)があり、その天蓋の両端から飾りが垂れ下がっている。塔身部の左右の側には縦に光明真言と呼ばれる真言(密教で唱える呪文で梵字で表わす)が刻まれている。

ろけんがくでんす じんざんがくみんざん
むすびでんす

大意は
靈験空しからざる遍照如來(大日如來)に帰命し奉る。大印ある者よ宝珠と蓮華と光明の徳を有する者よ、蔽迷開悟せしめ給え、ウン、

また、銘文をみると法名が鏡願禪門という男性が明応八年己未歳の十月十二日に逆修供養したのであるとわかる。



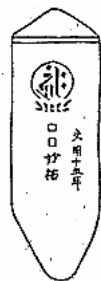
丸 孔
鏡願禪門
明應八年
十月十二日

「金石資料集」の
P5の図版によると
銘文は
明應八年
鏡願禪門
十月十二日
となされている

No.9 文明十五年(1483)弥陀一尊種子板碑

蓮華台の上に主尊キリークが載っている。主尊の回りは月輪で囲まれている。紀年銘は「文明十五年癸卯(卯)」と刻まれている。向かって左端には月日が刻まれているのであろう。中央には法名が刻まれている。法名の中に女性がよくつける「妙」の字があるのでこの法名は女性である。□□妙祐という女性が文明十五年に逆修供養したのであろう。

※「越谷市金石資料集」の五十ページには石の図版が載っているが、紀年銘の中で「癸卯」の干支が記載されていない。



丸 孔
□□妙祐
文明十五年癸卯

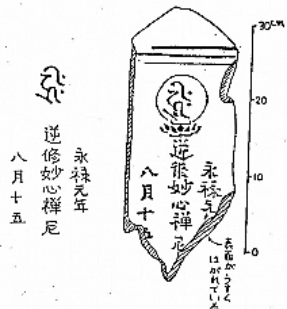


No.12 永禄元年(1558)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークを月輪で囲み、その下には蓮華台が刻まれている。この板碑は後期のものであるから、種子の彫りが初期のようにV字形に深く彫る葉形ではなく、浅い彫りとなっている。力強い彫りではある。銘文を読むと、法名が妙心禪尼という女性が永禄元年八月十五日に逆修供養したことがわかる。

さて、この板碑の最大の特徴は、彫られた主尊や蓮華台・銘文に埋め込まれた金が四百年以上も落ちずに残っていることである。このことは大変めずらしい。当時は彫ったあと、表面に何が刻まれているのか一目でわかるように金などを埋め込んだのであろうが、その名残りをこの板碑にみる事ができる。この板碑を発見したときさつは大聖寺本堂裏手の一部を畑にしようと掘り起こした所、昭和62年2月頃に偶然に

みつかったものである。板碑の表面を伏せられた状態で掘り出されたため金が今日まで落ちずに残ったのであろう。当時の名残をよく残している貴重な板碑といえる。



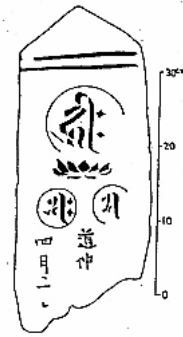
丸 孔
逆修妙心禪尼
永禄元年
八月十五日

No.10 文明年間弥陀三尊種子板碑

蓮華台の上に載る主尊キリーク(丸: 弥陀)と、その脇侍サ(丸: 観音)・サク(丸: 勢至)がそれぞれ回りを月輪に囲まれている。右図は「越谷市金石資料集」の五十一ページに載っている図版である。今(昭和63年9月)の板碑はかなりいたんでおり、向かって右の側面から下にかけて表面がうすくはかれ、文字が消失している。しかし、この金石資料集の図版によって法名が道仲妙□と呼ばれる女性が文明年間の四月二日に逆修供養したのであろうことがわかる。



丸 孔
道仲妙□
文明年間
四月二日



二. 安国寺の古文書

鈴木秀俊

大泊の浄土宗大龍山安国寺には、熊谷蓮生法師の守仏と伝える本尊阿弥陀如来立像や円空仏、観智国師書状（以上、市指定文化財）、将軍家より賜った寺領四石の朱印状、柿本人麿木像、山岡鉄舟筆軸一幅、それにこの古文書『諸事記録』が所蔵されている。

『諸事記録』は増上寺（本山）直末12箇寺の月番と本山役者（役目にある人）によって書かれた明和2（1765）年から安永、天明年間を通して寛政3（1791）年に至る27年間の記録である。

明和から天明は、浅間山の噴火、奥羽の飢饉疫病の流行、関東の出水、京都の火災など災害が続いた時代である。

この『諸事記録』の中に、本山から末寺宛の江戸打ちこわし騒動に関する触れ書き、寛政年号改元に関する触れ書き、本所回向院施餓鬼修行に関する触れ書きなどが含まれている。

天明6（1786）年7月21日に「近年、金銀融通宜しからず、諸家差し支え」で始まる触れ書きが出され、翌7年5月18日には、江戸で米屋などの打ちこわし騒動が起きた。この時、伊奈半左衛門は騒動を鎮めるために働いたという。

十代将軍家治は江戸の打ちこわしの前年の天明6年9月8日に亡くなり、10月4日に東叡山に御葬送する。天明7年4月15日に家斉が11代将軍になる。翌月に江戸の打ちこわしが起こるのである。

天明8年12月に寺社奉行の仰せにより、諸国の朱印寺社に五穀豊熟・万民安穩の祈祷や浄土宗5寺に焼亡・溺死・餓死・疫死などの者のために施餓鬼修行を仰せ付ける。同9年正月25日に寛政と改元されたが、2月3日に寛政年号改元が仰せ出される。また2月9日の触れ書きによると、来る2月12日に本所の回向院で施餓鬼修行が行われるという。

江戸打ちこわし騒動に関する趣書

「諸藩事記録」四三ページより四四ページ 読み下し

同年(天明七年)五月十八日当りより昼夜共、町中米屋共打ちこわし申し候、以ての外騒々敷、昼夜安心これ無き事、江戸中端々迄残る所無く米屋の分、其の外にも平日溜ませ候者ども打ちこわし、又、有徳の家等、これに依り高い一統相体み、別て米穀売買これ無き神社は、甚だ難渋に付き本山へ米拜信相願ひ候事、公儀より町方御教い米出し候事、回文
他出百位いに至る無用の山、申し来る
月番 光岳寺記

同年四月十五日、將軍宣下これ有り候事 (十一代家齊)

一五月前書きの通り困窮に付き、月番寄合い暫く相休み候事

一世上この節、米穀私底にて諸人困窮に及ぶに付き、公儀にても色々御世話もこれ有り候え共、この節町方騒が敷候に付き、町人共恐れ候哉、米穀隠し置候者も、これ有る趣、風聞もこれ有り、人寄り次第に米穀差支え申すべくと見込み、飯米の手当の外に余分に貯え置き候も、これ有る由に付き、この節、右様の儀これ有り候ては、いよいよ世上一統難儀の事に候間、武家・神社・町方共一統教い合ひ候心得にて、その家々の飯米かなり間に合ひ候はば、余分米は早々米屋共へ売り払い候様致すべく候、右、本文の通り、世上難儀の旨を一統に、得と相弁え助け合ひ候様、心得べく候、且又、武家にては、主人も存せざる家来の心得違ひ等にて、町方より米穀預かり候者も、これ有る趣、風聞もこれ有り候間、是等は猶以て町方へ差し戻し候様致すべく候、右の趣、もし外より相知れ候はば、主人は勿論、役人迄も急度越度(言つとおつと)たるべく候、尤も神社・町方にては前文の趣を相聞き、米穀隠し置き候風聞の者これ有るに於いては、役の者指し遣わし、たとへ武家方預かり米と申し候共、糾しの上、品により御取上に相成り、急度御答仰せ付けらるべく候
右の通り相觸れらるべく候
一増上等

御霊屋料、その外、方丈額、近御村々並びに一宗寺院共、この節昼夜限らず狼藉者押し来たり騒が敷候趣申し立て候、これに依り、右村々へ堀藩刀組の者相廻り狼藉のもの、これ有り候は召捕らせ候答に候、伊奈半左衛門御代官所入り会の村々は勿論、最寄りの分は半左衛門家米を相廻し候、是又狼藉者これ有らば、召捕らせ候積もりに候、尤も御府内一宗寺院、その外神社奉行支配の分は常々見廻りの番差出し候儀に付き、この節、別て察々見廻らせ狼藉ものこれ有る節は召捕らせ申すべし、もし見廻りの者参り合わさざる節、狼藉ものこれ有り候は、早々神社奉行所へ訴え出候様申し渡し候、右の趣、増上寺役者その外へも申し聞置き候様、致されべく候、且、藩刀組・半左衛門家米相廻り候場所、右兩人申し談すべく候
未 六月五日
月番 龍閑寺

此の節、米穀私底にて江戸町の儀、飢渇に及び難儀の趣に付、右御教い方取り計らいの儀、伊奈半左衛門へ仰せ付けられ候、右御用中、在町神社門前の者呼び出し吟味等々の儀、其の時、半左衛門より懸合いに及ばず取り計らいの節の儀候間、此の段、相心得らるべく候

未 六月十一日
月番 龍閑寺

徳川民部殿次男松平慶之丞殿、田安家相統仰せ出され徳川と称えられ、田安領十萬石、其の候違われ候説、仰せ出られ候、此の段向々へ違せらるべく候

未 六月
月番 龍閑寺

浄土宗五寺と回向院の施設鬼供養や
寛政年号改元に関する触書

「触書記録」五二ページ四行目より五五ページ

諸国御朱印の幸社において五穀豊熟、万民安穩の儀、一統に祈禱遂げべき旨仰せ出され候間、右の趣、申し渡されべく候、尤も守り札・護符珠の品施行機儀も勝手次第致すべく候、

一、先年浅間山崩、奥羽飢饉疫癘、且つ関東出水、京都火災等にて死亡致し候も少なからざる旨、相聞き候、付けたり姫若様御事、今日より御養様と称え奉るべき旨、仰せ出され候

二月四日

別紙御書き付けの趣、其の當得候、以上

二月六日

本山

役者

末山中

浄土宗京都智恩院、向土州新田大光院、同奥州若城専称寺、同羽州庄内大智寺、同葛西松川仲臺寺、同御府内本所回向院、右、寺院に於いて今度、旗懸鬼修行致すべき旨、仰せ付けられ候、右修行料として銀拾枚づつ下され候間、其の段申し渡されべく候、

十二月

右御書き付けの趣、厚き思召しを以て仰せ出され候儀に候間、有り難く敬事いたし銘々御朱印頂戴の身分にては、冥加の爲にて、後丹波抽きでるべきは勿論の事に候、守り札並びに護符珠の品施し候は、在方の儀にては、向寄々へ百姓などへ守り札等施行致すべくは勝手次第との事に候、尤も小御朱印の寺社等札配り候は、難儀の事にもこれ有るべく候、仰せ付けられ候には助けこれ無く、若し守り札配り度存じ候者も候はば、心ざし次第たるべく候、然れども当地などにて、右紳の盛いたし候筋にはこれ無く候矣、心得違ひこれ無き候、申し達せらるべく候、

十二月日

別紙御書き付け西通、旧鹽崎日寺社奉行に於いて、松平紀伊守殿仰せ渡され候間、御書面の通り諸寺院共に有り難く敬達し有るべく候、

一五穀豊熟、万民安穩祈禱の儀、

御

御朱印頂戴の寺院、右折禱修行相済を候上、当山迄届け出候儀、有無共勝手次第の事に候え共、若し届けこれ有り候分は、御当山より御奉行所へ其の段申し上げべく候、其の旨相心得らるべく候、

一御朱印これ無き寺院にても回恩の爲、五穀豊熟、万民安穩の祈禱修行これ有るべく候、尤もこの分は修行相済を候共、御当山まで届け出候には及ばず候、

一焼亡・餓死・餓死・疫死等のため施餼鬼修行の儀、給本山並びに五箇寺へ仰せ付けられ、御宗門一統有り難く存じ奉り候、これに依り其の余諸寺院にても、右の訳申し置き回向これ有るべく候、

一右折禱並びに回向等の儀に付き、旅入前物等の儀堅くこれ無く、如法修行これ有るべく候、

一因宗安全の祈禱、且つ法界回向は、我が門の返口勿論の儀に候へば、諸寺院に於いて平日共如法修行これ有るべく候、右の通り御心得、御支配下へも御觸れこれ有るべく候、

以上 正月二十三日

増上寺 役者

別紙御書き付け西通、並びに練山御添え書きの趣、其の意を得られ折禱修行並びに諸置回向、各寺に於いても、これ有るべく候、 以上

正月二十四日

本山 役者

末山中

寛政

右の通り年号改元、去る二日仰せ出され候旨、板倉左近將監殿に於いて仰せ渡され候間、其の意得らるべく候、以上

二月六日

本山 役者

末山中

先刻疑い出られ候、この度回向院抽紙鬼修行隨喜の爲、出勤これ有り度段、出る出ざる共是は指図致し難く候間、勝手志し次第に致されべく候、一山主御出の儀は、来る十二日朝飯後、御出成られ候間、其の當得らるべく候、此の段疑いに依り相達し申すべく候、 以上

二月九日

本山 役者

三、一五〇年前の大相模不動尊全景図

高崎 九

今の相模町にある真大山大聖寺は、昔から「大相模の不動様」と呼ばれ親しまれている埼玉東部地域の巨刹です。しかし残念ながら現在壮大なる面影を偲ばすものは巨大な惣門のみとなりました。

今から百年前の明治二十八年七月十日午前一時頃失火し、本堂を始め十三棟の大伽藍を焼失してしまいました。かつての荘厳な境内とはどのようなものであったでしょうか。

今から四十五年前の昭和二十九年、市内において「武州大相模真大山不動尊全景図」を発見し、跳び上がって喜びました。早速、大聖寺第三十九世の加藤義詔師と共に諸資料と突き合わせて建造物名の割り出しにほぼ成功しました。

昭和末年頃、「武州大相模真大山不動尊全景図」の所在が不明になっていることを知り、この度一般に公開することにしました。公開するにあたり最後に問題になったのは、どこの誰かが、いつ頃作成したのかでありました。

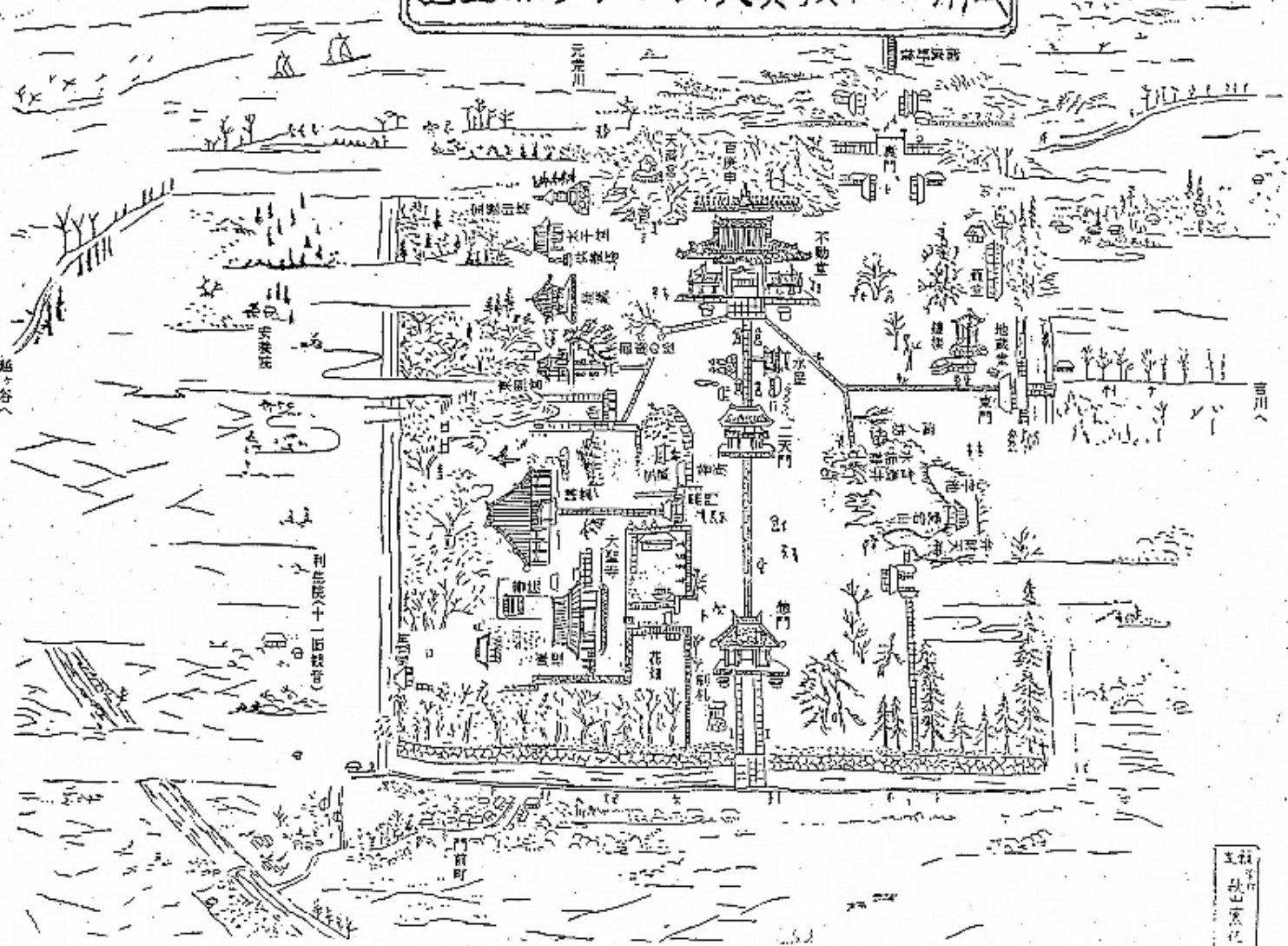
全景図の右下の「願主 秋山□□」を市内の主な家系を調査し、その人物の生活期間を割り出す一方、全景図の建造物全部について、いつ頃建築し、いつ頃失ったのか、そして全景図に示す建造物全部が存在した期間はいつ頃であるのか。勿論、建造物の形・大きさ・配置、その上、主な植物景観も想像し、最後の決め手は明治十七年（一八八四）頃の写真で、その写真と照合した結果、「武州大相模真大山不動尊全景図」は凡そ今から二百五十年前の寛保年間（一七四五年頃）、願主は西方村山谷名主秋山利左衛門康任と結論づけることができました。

復元図は必ずしも大聖寺の全盛期とは言えないまでも、数多くの建物が並び、鬱蒼たる森に囲まれていたことが見取ることができました。

全景図の検証の為に数年がかりで作成した「大聖寺年譜」と照合することによってより立体的に眺めることができます。

なお、この全景図の原図をお持ちの方がおりましたら、ご一報ください。

武州大相模真大山大動景全圖



昭和二十九年発見した原図を書き写して縮小し建造物名称を記入し平成七年完成

作成者 高野力

武州大相模真大山大動景全圖

四・越谷の養鶏と鶏魂碑

本林 巨屋 廿六 龍

昭和五十八年に大聖寺（大相模不動尊）境内に「鶏魂碑」が建立された。その碑をここに紹介する。

表面には、横書きで「鶏魂碑」、その下段には、横書きで「越谷市長 島村慎市郎 謹書」と刻まれている。裏面には、越谷の養鶏の沿革について刻まれたいる。次にその裏面の文字を全文紹介する。

越谷養鶏の沿革

埼玉県の東部 沖積地に位置する越谷は 元荒川 綾瀬川 古利根川が流れ水郷の地として知られる。当地に人びとの生活が展開されたのは 見田方遺跡の発掘により 古墳後期から古代にかけてと推定されており、天平勝宝二年（七五〇）の創立を伝える大相模不動尊をはじめ 野島の地藏尊や 越谷の久伊豆神社など悠久一千年の歴史を伝える多くの旧跡があり、これらを中心に集落が形成されてきた。江戸時代は水稲を中心とした穀倉地帯として、大きな役割を果たしてきたが、また交通の要衝として、日光道中越谷宿が取り立てられ、かつ六斎市により商圏の中心として栄えた。近代に入り、農業は畜産や工業などを取り入れ、多角的な経営に移行していった。このなかで養鶏は大正期から数人の先覚者により経営されるようになったが、当初は全く初歩の段階であり、すべてが手探りの状態であった。当初は平飼で、母鶏孵化により雛を育成したが、その後、優良雛の導入や飼育方法の改良がはかられ、さらに、昭和の時代に入ると土地の効率化や管理の簡素化をはかる必要から集約養鶏が考えられ、昭和十年にわが国で初めて鶏舎を立体化した三段式バタリ方式による飼育方法が考案された。その後、戦中の飼料不足で、一時衰退したが戦後急速に進展をみて昭和四十三年には飼養戸数五〇〇戸飼育羽数は一〇〇万羽にも達しその販売額は米作を上回る販売額となった。こうしてバタリ方式による養鶏の発祥の地として、また集約立体養鶏においては、他に類をみない規模となった。このため全国各地から視察に訪れる者、跡を絶たず、越谷養鶏方式が全国に普及した。これがいては現在のケージ養鶏の基を開いたものであり、わが国、養鶏産業に与えた功績は、計り知れないものがある。今やわが国の養鶏産業はアメリカに次ぐ世界第二の生産高を誇り、国民の健康増進に大きな役割りを果たし、民族永遠の繁栄に貢献できるのも、この先覚者たちの血と汗の結晶であり、その功績を高く顕彰するものである。ここに養鶏を業とする者及びこれに関係する多くの業者相集い、人類生存のためその生を全うせず生命を断つた多くの鶏群霊に対しその霊をなぐさめるとともに、越谷の地がわが国集約立体養鶏の発祥の地であることの由来を記し、永く後世に伝えんとするものである。

昭和五十八年九月二十八日 建之

越谷市養鶏協会々々長 森屋英龍 撰文
鶏魂碑 建立 奉贊者名

越谷市養鶏協会

須賀友五郎

飼料鶏卵会社

会長 森屋英龍

宮川忠志

大洋飼料(株)

副会長 笠口年五郎

石井正男

豊橋飼料(株)

岡安忠蔵

須賀又市

日本農産工業(株)

同 尾川信一

須賀吉太郎

伊藤忠飼料(株)

理事 島田三之

宮川章一

中部飼料(株)

同 石井直吉

宮川 恵

(株)鈴木商店

同 鈴木重男

特別会員 柳忠義

(株)須賀商店

同 大塚隆一

同 齊藤亀之輔

(株)大野商店

同 平野壽久

山一飼料(株)

同 石塚義一

松井産業(株)

同 石塚長五郎

越谷地区食鳥肉組合

石井商店

同 浅子栄治

組合長(株)鳥正小山

伊勢長商店

同 岡安徳之助

副組合長 野口喜代三郎

(株)埼玉鶏卵センター

同 森田義雄

理事 染谷博

須賀文蔵

會計 石井 昭

同 鳥昇商店

鈴木卯之吉

監事 辻 武彦

同 小沢澄

薬品器具淨化場

同 石井義明

會計(株)浜野食鳥

(株)中里薬局

峰岸弘志

(株)高島屋本店

勝田商事(株)

辻 敬一郎

(株)鳥 清

(株)カドヤ

横川雅美

(株)秋山商店

武田薬品(株)

山崎武夫

大内食鳥店

稲垣太陽堂薬品

江原好太郎

鳥 忠

(株)化血研

名倉藤徳

鳥安商店

日生研(株)

秋谷友三郎

野口正男

協和化工(株)

須賀賢一

(株)深井商店

(株)大畑淨化場

小川武夫

半戸正男

(株)ハイデオ

小川俊一

入沢好秋

(株)後藤淨卵場

会田岩蔵

鈴木商店

(株)服部養鶏園

須賀伸太郎

日本若めす農場(株)

真大山大聖寺 第四拾世 弘進 謹書